

=== TACS 情報 第3号 ===

(Toyama Agricultural Cultivation Management Information System)

令和4年6月14日

農業技術課 広域普及指導センター

1 気象経過

(1) 気温

5月の平均気温は、18.1℃（対平年差+0.6℃）と平年に比べ高かった。

6月上旬の平均気温は、19.2℃（同-1.1℃）と平年に比べ低かった。

(2) 降水量

5月の降水量は、111.0mm（対平年比90%）と平年並であった。

6月上旬の降水量は、33.5mm（同159%）と平年に比べ多かった。

(3) 日射量

5月の平均日射量は、20.8MJ/m²/日（対平年比113%）と平年に比べかなり多かった。

6月上旬の平均日射量は、20.5MJ/m²/日（同105%）と平年に比べ多かった。

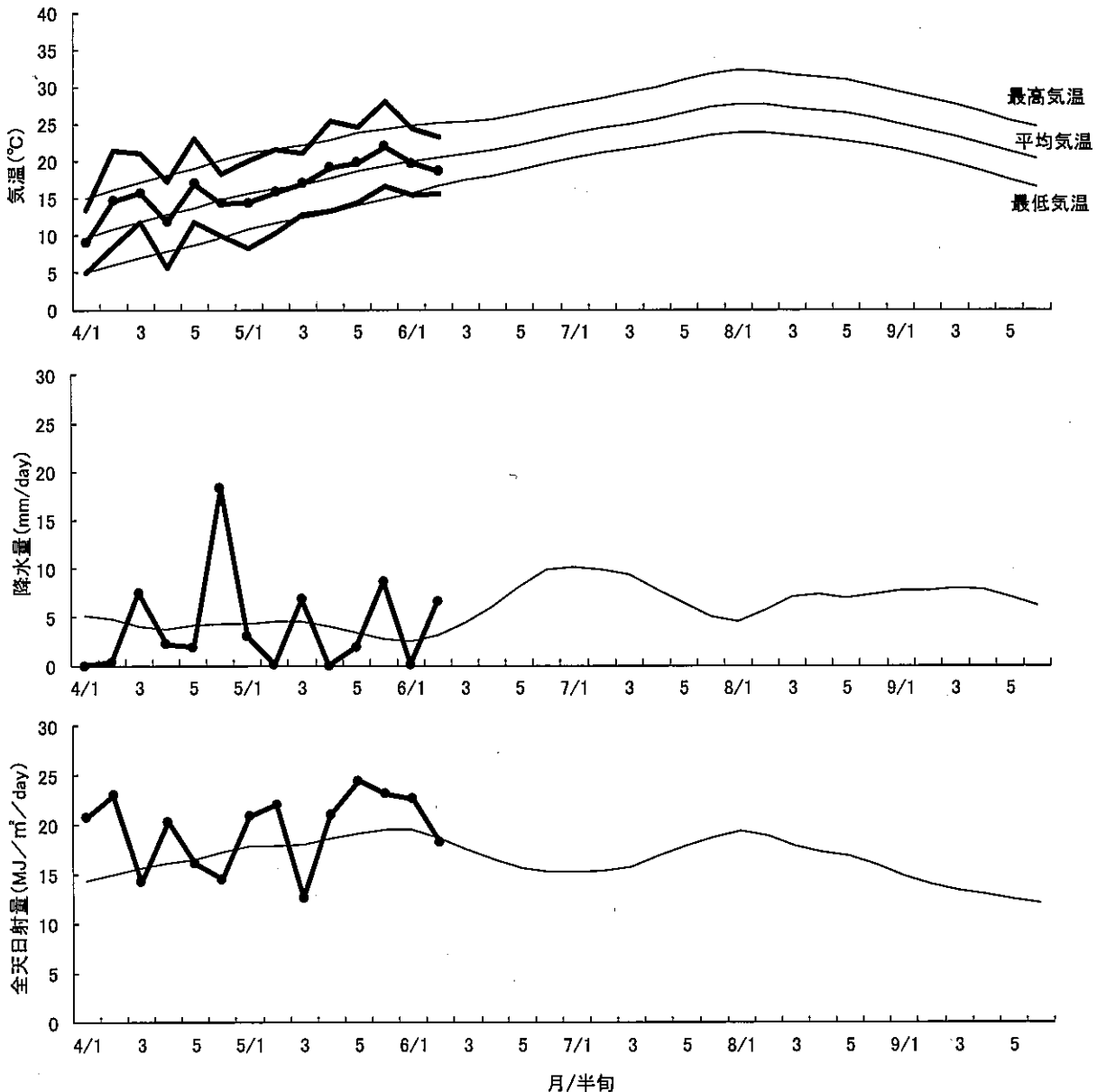


図1 令和4年の気象経過（富山地方気象台）

2 生育状況（生育観測ほデータ）

(1) コシヒカリ

平年に比べ、草丈はやや短く、茎数はやや多く、葉色は並、葉齢は0.2葉遅れている。
 葉齢を揃えて比較すると、平年に比べ、草丈はやや短く、茎数は多く、葉色は並となっている。

表1 「コシヒカリ」の生育状況（6月14日 生育観測ほ）

年次	田植日 (月/日)	草丈 (cm)	茎数		葉齢	葉色	
			(本/株)	(本/m ²)		葉色板	SPAD
R4	5月13日	31.5	19.4	427	8.2	4.3	40.4
R3	5月14日	32.4	15.9	349	7.8	4.3	39.8
平年	5月14日	35.0	18.6	400	8.4	4.4	40.4
前年比・差	-1	97	122	123	0.4	0.0	0.5
平年比：差	-1	90	104	107	-0.2	0.0	-0.1

注) 平年 : H24~R3の平均

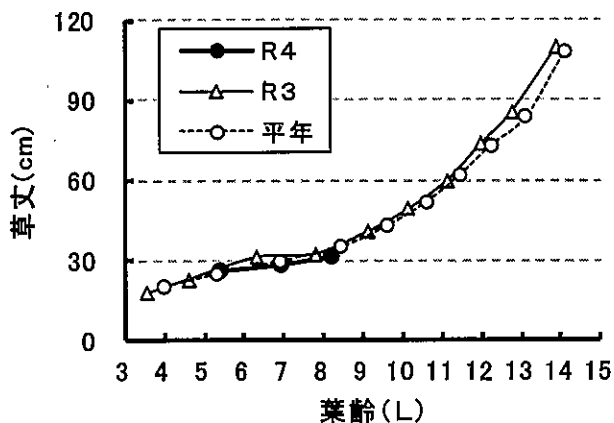


図2 草丈の推移（生観コシヒカリ）

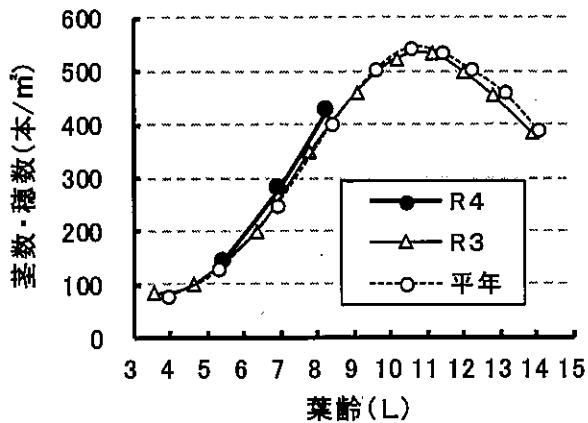


図3 茎数の推移（生観コシヒカリ）

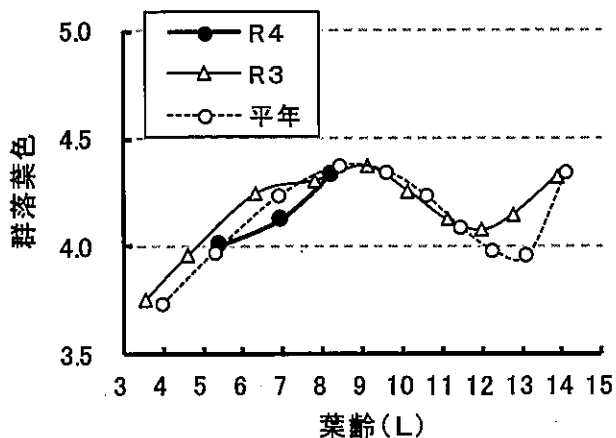


図4 葉色の推移（生観コシヒカリ）

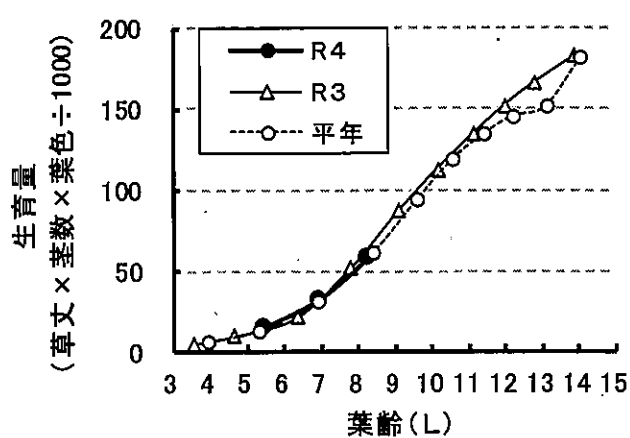


図5 生育量の推移（生観コシヒカリ）

(2) てんたかく

平年に比べ、草丈は短く、茎数はやや多く、葉齢、葉色は並となっている。

葉齢を揃えて比較すると、平年に比べ、草丈は短く、茎数はやや多く、葉色は並となっている。

葉齢から予測すると、幼穂形成期は、6月25日頃と見込まれる。

表2 「てんたかく」の生育状況(6月14日 生育観測ほ)

年次	田植日 (月/日)	草丈 (cm)	茎数		葉齢	葉色		幼穂 形成期
			(本/株)	(本/m ²)		葉色板	SPAD	
R4	5月1日	35.5	28.0	608	9.8	4.5	42.0	(6月25日)
R3	5月3日	36.5	26.2	565	9.3	4.7	43.8	6月27日
平年	5月4日	40.1	26.3	559	9.7	4.6	42.3	[6月25日]
前年比・差	-2	97	107	108	0.5	-0.2	-1.8	(-2)
平年比・差	-3	89	106	109	0.1	-0.1	-0.3	[0]

注1) 平年 : H24~R3の平均、ただし幼穂形成期の平年値 [] は、R2、3年の平均

注2) 本年の幼穂形成期は、6月14日現在の葉齢から予測。

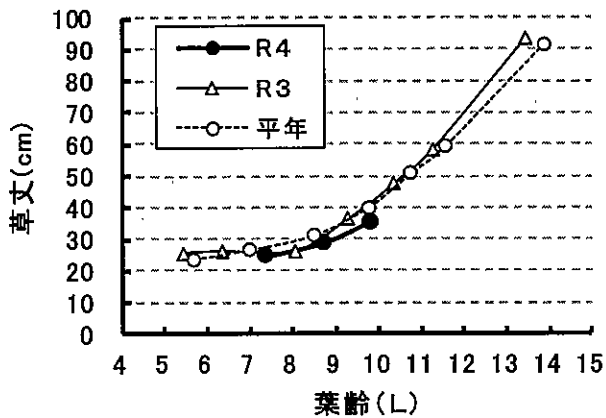


図6 草丈の推移(生観てんたかく)

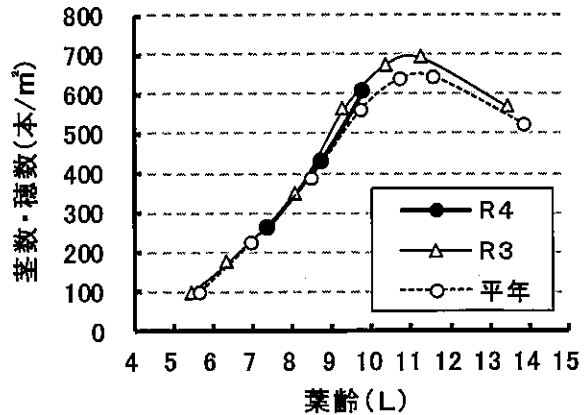


図7 茎数の推移(生観てんたかく)

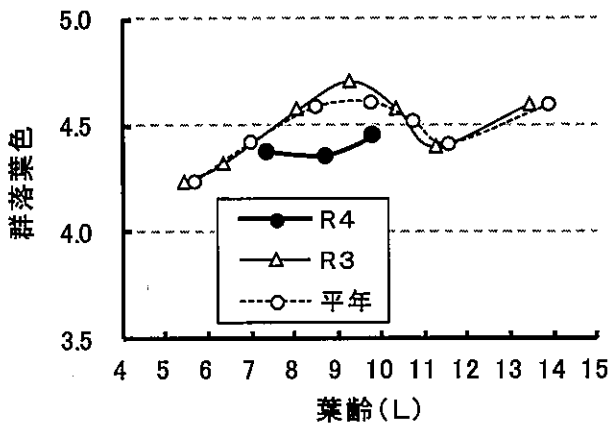


図8 葉色の推移(生観てんたかく)

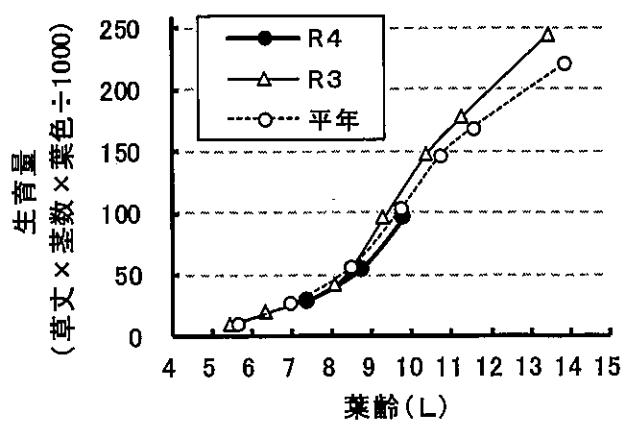


図9 生育量の推移(生観てんたかく)

(3) てんこもり

平年に比べ、草丈は短く、茎数はやや少なく、葉色は並、葉齢は0.4葉遅れている。
葉齢を揃えて比較すると、平年に比べ、草丈はやや短く、茎数、葉色は並となっている。

表3 「てんこもり」の生育状況（6月14日 生育観測ほ）

年次	田植日 (月/日)	草丈 (cm)	茎数		葉齢	葉色	
			(本/株)	(本/m ²)		葉色板	SPAD
R4	5月8日	27.6	24.6	469	9.2	4.4	41.7
R3	5月9日	28.0	22.6	440	9.3	4.5	41.6
平年	5月8日	31.4	28.0	520	9.6	4.5	41.4
前年比・差	-1	99	109	107	-0.1	-0.1	0.1
平年比・差	0	88	88	90	-0.4	-0.1	0.3

注) 平年 : H24~R3の平均

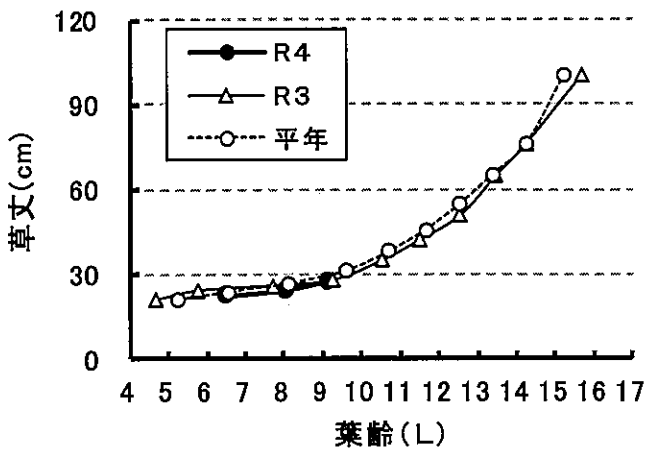


図10 草丈の推移（生観てんこもり）

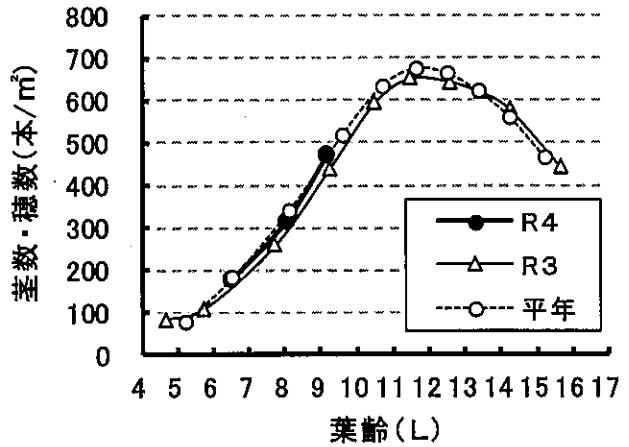


図11 茎数の推移（生観てんこもり）

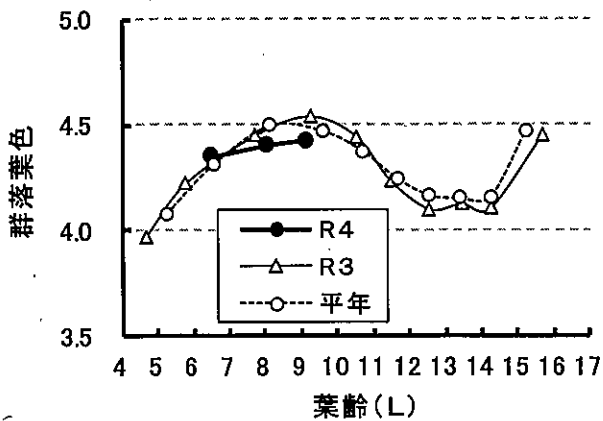


図12 葉色の推移（生観てんこもり）

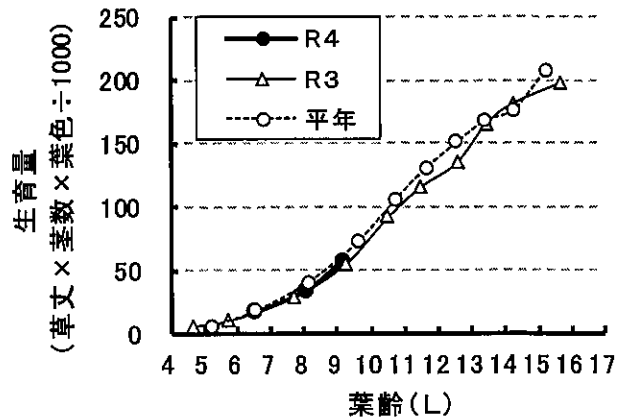


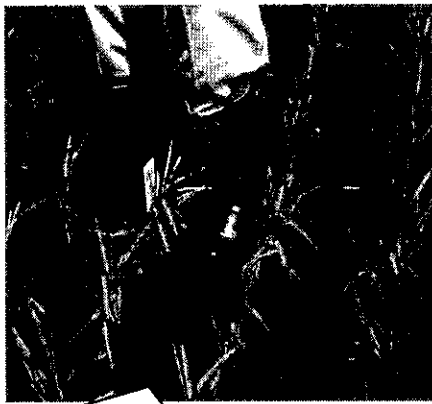
図13 生育量の推移（生観てんこもり）

3 当面の技術対策

- ・中干しとその後の間断かん水で、幼穂形成期頃までに足跡の深さ 3 cm 程度の土壌硬度に誘導する。
- ・幼穂形成期以降は、飽水管理（足跡に水が残る程度の湿潤状態を維持）を行う。

(1) 「コシヒカリ」の管理

- ・今後、葉色の急激な低下を防ぐため、中干し後の間断かん水は、乾かしすぎないように留意し、幼穂形成期頃までに土壌硬度を「足跡の深さ 3 cm 程度」に誘導する。
- ・まだ中干しを実施していないほ場は、早急に中干しを開始する。
- ・安易な窒素の中間追肥は、過剰分げつや過剰籾数となるので原則、施用しない。また、作付前にケイ酸質資材を散布していないほ場では、積極的にこれらの資材を散布し、稈質を強くする。



中干しの終了時に、ほ場中央部でくるぶしが軽く沈む程度を目安とする。

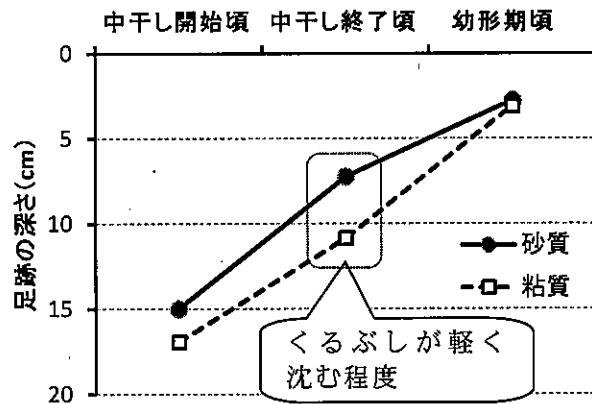
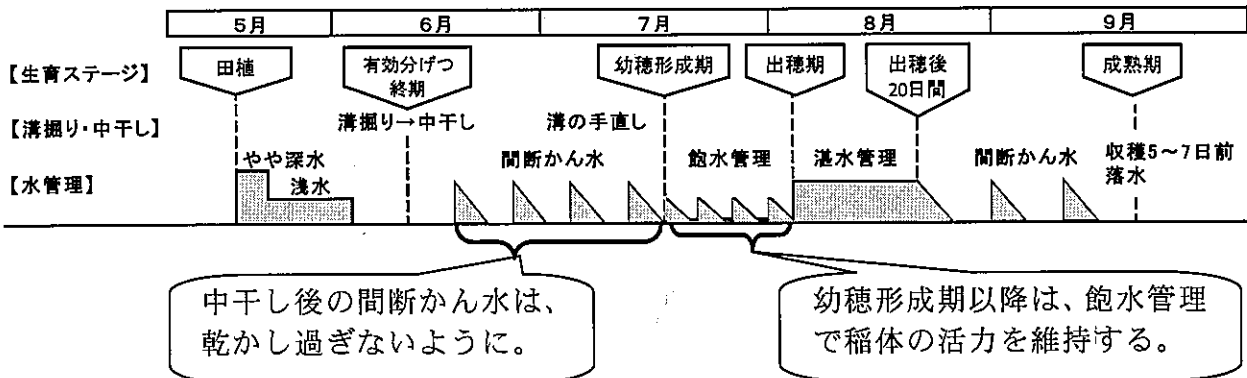


図 14 ほ場中央部の足跡の深さの推移 (H22、23 生育観測ほ)

<水管理のイメージ>



(2) 「てんたかく」の管理

- ・ 現段階で生育観測ほの幼穂形成期は、平均で6月25日頃と見込まれる。
- ・ 今後、葉色の急激な低下を防ぐため、中干し後の間断かん水は乾かしすぎないように留意する。
- ・ 肥効調節型基肥栽培では、安易な追肥は過剰籾数を招くので原則、施用しない。ただし、現在の葉色が4.0（砂壤土4.2）より淡い場合は、直ちに窒素成分で1.0kg/10a程度の追肥を行う。
- ・ 分施肥系では、各ほ場の幼穂形成期を確認し、表5を目安に穂肥を施用する。ただし、過剰籾数を防ぐため、壤土～埴壤土では、幼穂形成期の葉色が4.3以上かつ莖数650本/m²以上の場合、沖積砂壤土では葉色が4.5以上かつ莖数700本/m²以上の場合には、1回目の穂肥は施用しない。
- ・ 幼穂形成期以降は、稲体の水分要求量が高まるので、飽水管理を行う。

表4 生観「てんたかく」の幼穂形成期

品種	年次	田植日 (月/日)	6/14時点の		幼穂形成期	
			葉齢(L)		(月/日)	葉齢(L)
てんたかく81	R4	5/1	9.8		(6/25)	(11.2)
	R3	5/3	9.3		6/27	11.1
	R2	5/2	10.3		6/22	11.2
てんたかく	H23～R元	5/5	9.7		6/28	11.6

表5 「てんたかく」の土壌区分別穂肥窒素施用量
の目安 (kg/10a)

土壌区分	1回目		2回目	
	施用時期		施用時期	
	幼形期	幼形期の10日後	幼形期	幼形期の10日後
沖積 埴壤土	1.5	1.5	1.5	1.5
	1.5	1.5	1.8	1.8
	2.0	2.0	2.0	2.0
洪積 埴壤土～壤土	1.5	1.5	1.8	1.8

(3) 「てんこもり」の管理

- ・ 今後、葉色の急激な低下を防ぐため、中干し後の間断かん水は、乾かしすぎないように留意し、幼穂形成期頃までに土壌硬度を「足跡の深さ3cm程度」に誘導する。
- ・ まだ中干しを実施していないほ場は、早急に中干しを開始する。
- ・ 肥効調節型基肥栽培、分施肥系のいずれにおいても、幼穂形成期以前に葉色が4.0（砂壤土4.2）より淡くなる場合は、直ちに窒素成分で1.0kg/10a程度の追肥を行う。

(4) 病害虫防除の徹底

①斑点米カメムシ類

- ・ 今後、気温の上昇に伴い発生量が多くなると見込まれるので、イネ科雑草の穂が出ないよう草刈りを徹底する。

※ 草刈り運動期間：7月1～10日 一斉草刈り日：7月2～3日

- ・ 本田内のノビエやホタルイも、斑点米カメムシ類による被害を助長するので、除草に努める。

②いもち病 ※平年の初発確認日は7月10日（R3：7月15日）

- ・ 苗箱施薬を施用していない場合は、予防粒剤を6月20日頃までに散布する。
- ・ 現在、感染好適日は出現していないが、BLASTAM情報（農業研究所）を参考に、常発地を中心に巡回し、葉いもちの発生がみられたら直ちに防除する。

BLASTAM情報（葉いもち予測システム）HPのURL

http://taffrc.pref.toyama.jp/nsgc/nougyou/link_flat.phtml?TGenre_ID=314&t=pdf2
（農林水産総合技術センター農業研究所HPの研究関連情報に掲載）

③紋枯病 ※平年の初発確認日6月23日（R3：7月1日）

- ・ 前年発生がみられたほ場で箱施薬剤を施用していない場合は、出穂3～4週間前（粒剤）または穂ばらみ期（粉剤、液剤等）の防除を確実に行う。
- ・ 本田防除は要防除水準に基づき防除要否を判定し（表6）、適期に、薬剤が株元に付着するように散布する。

表6 紋枯病の薬剤散布適期と要防除水準

品 種	薬剤散布適期 (防除要否判定時期)	要防除水準 (発病株率)
てんたかく	出穂14日前頃	5%
コシヒカリ	出穂10日前頃	15%
てんこもり	出穂7日前頃	(15%)*

※「てんこもり」要防除水準（発病株率）は暫定値

④白葉枯病

- ・ 大雨により浸水や冠水した場合、白葉枯病が発生しやすくなるので、常発地等では、オリゼメート1キロ粒剤を出穂3～4週間前に散布する。

「富富富」の生育状況と当面の技術対策について

1 生育状況（生育観測ほ等データ）

近年に比べ、草丈はやや短く、茎数はやや少なく、葉色は並、葉齢は 0.4 葉遅れている。

葉齢を揃えて比較すると、近年に比べ、草丈、茎数、葉色は並となっている。

表1 「富富富」の生育状況（6月14日 生育観測ほ等）

年次	田植日 (月/日)	草丈 (cm)	茎数		葉齢 (L)	葉色	
			(本/株)	(本/m ²)		葉色板	SPAD
R4	5/16	28.2	16.8	352	7.8	4.3	40.4
R3	5/16	27.2	14.9	322	7.6	4.4	41.2
近年	5/15	30.7	17.6	378	8.2	4.5	42.0
前年比・差	0	104	112	109	-1.1	-0.2	-0.8
近年比・差	1	92	96	93	-0.4	-0.1	-0.4

注) R4：生育観測ほ、登熟向上収量安定化試験・対照区（合計8カ所）の平均

R3：生育観測ほ、良食味栽培・対照区、密苗栽培・対照区（合計12ほ場）の平均、近年：H29～R3の平均

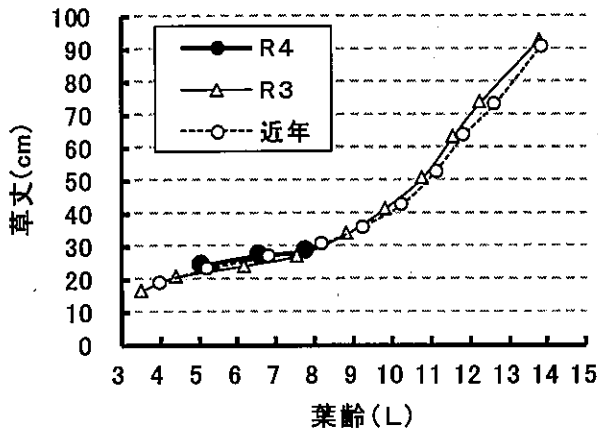


図1 草丈の推移（富富富生育観測ほ等）

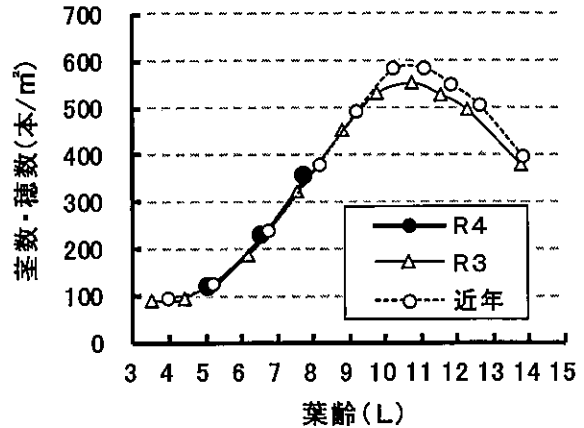


図2 茎数の推移（富富富生育観測ほ等）

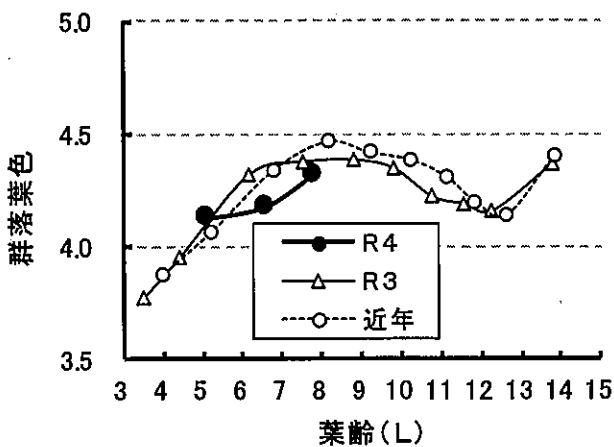


図3 葉色の推移（富富富生育観測ほ等）

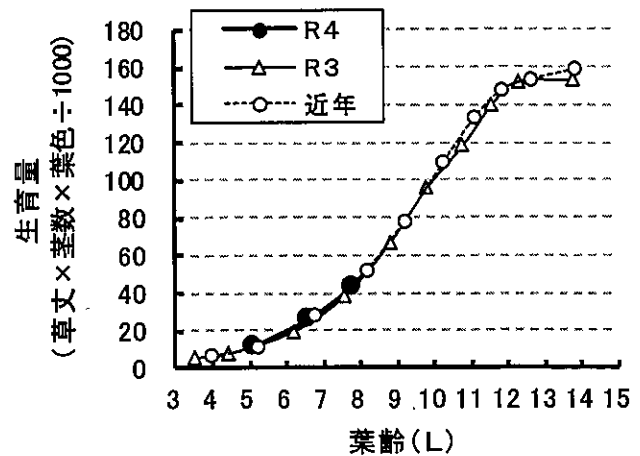


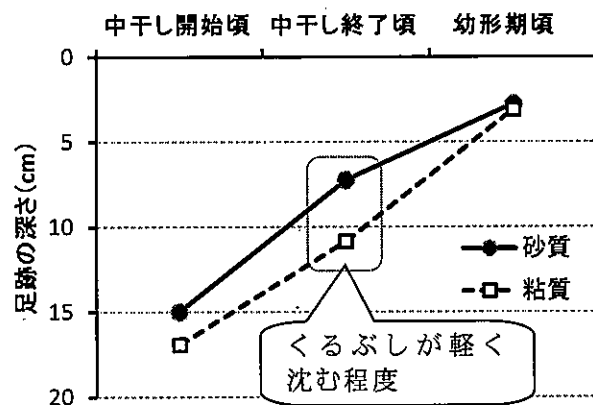
図4 生育量の推移（富富富生育観測ほ等）

2 当面の技術対策

- ・中干し後は幼穂形成期まで落水期間が長めの間断かん水を行い、幼穂形成期頃までに足跡の深さ 3 cm 程度の土壌硬度に誘導する。
- ・まだ中干しを実施していないほ場は、早急に中干しを開始する。

(1) 水管理

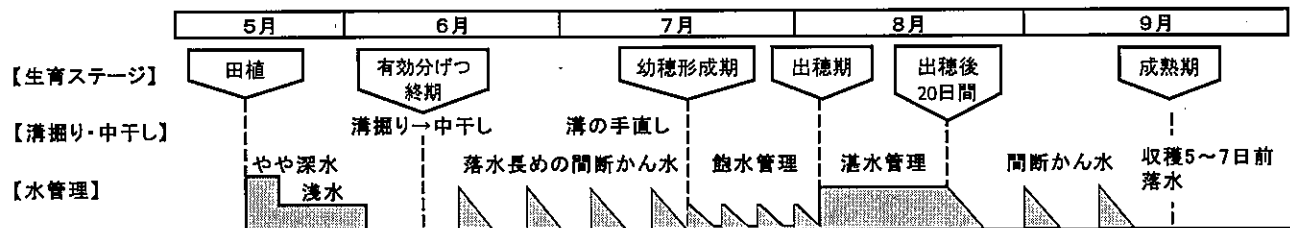
- ・中干し後は幼穂形成期まで落水期間が長めの間断かん水を行い、幼穂形成期頃までに足跡の深さ 3 cm 程度の土壌硬度に誘導する。また、籾数の適正化のため、幼穂形成期の SPAD 値 35 (群落葉色 4.0 程度) に誘導する。
- ・まだ中干しを実施していないほ場は、早急に中干しを開始する。



中干しの終了時に、ほ場中央部でくるぶしが軽く沈む程度を目安とする。

図5 ほ場中央部の足跡の深さの推移 (H22、23 生育観測ほ)

<水管理のイメージ>



幼穂形成期に SPAD 値 35 (群落葉色 4.0 程度) に誘導するため、中干し後は幼穂形成期まで、落水期間が長めの間断かん水を実施。

(2) その他の管理

病虫害及び雑草防除は、コシヒカリに準じて実施する。ただし、生育期間を通しての化学合成農薬の成分使用回数が 12 以内となるよう留意する。

次回の調査日は 6 月 21 日 (火) です。
「てんたかく」は幼穂長の調査をお願いします。